

三乗における仏と法華經の釈尊

河 村 孝 照

一、研究の動機

法華經の教説は、二乗作仏と久遠実成を二大柱とすることは、先学の指摘するところである。二乗の作仏から、ただちに考えられることは、二乗の修行道を中心に説く小乗仏教と法華經とは、いかなる関係が存するものであろうかということである。

この関係については、水野弘元博士は、「部派仏教と法華經の交渉」と題する論文において、法華經と部派仏教の関係は、部派仏教を煩瑣な阿毘達磨仏教の意味に解すれば、そこにはほとんど関係がない、という見解を下されている。^①

さて本研究においては、それでは小乗の説く釈尊と、法華經において説かれる釈尊とは、教説の上においては関係があるか否か、つまり、法華經の仏陀觀と小乗の仏陀觀との関係いかに、ということである。

法華經の説くところが、三乗方便、一乘真实であり、三乗を開会して一仏乘に会入せしめるのであれば、三乗に説かれる仏陀と、法華一乗に説かれる仏陀とは、どこがどんな風に違うのか、誰れもが関心をひくところであろう。古来の碩学は、新成の仏陀なりとみられる釈尊も、法華經においては実は垂迹の仏身であると説くところが、三

乘の仏陀觀と、法華經の仏陀觀の相違するところであると指摘する。

そこでいまはこの課題を、宗教学上の粗上にのせて、三乘に説かれる仏と、法華一乘に説かれる仏とを比較し、その相違点を具体的に明示することによって、法華一乘の仏陀觀をより明瞭に示してみたいと思う。従来こうした角度からの研究は、かならずしも完全であったとはいえないと思うからである。

二、有部の仏陀像

A 八十八滅

小乗有部の仏陀の特徴は、あくまで人間積尊に即して、八十にて入滅したと説かれるところにあるといえる。

八十八滅の歴史的事象に関する有部の伝承は、^②

一、仏は出定して般涅槃したこと。

二、拘尸城において般涅槃したこと。

三、仏は北首、右脇して臥して般涅槃したこと。

四、仏は中夜分において般涅槃したこと。

五、仏が般涅槃後において釈迦族のみ具足戒を授けることを許したこと。

六、香乳をもって、如来を焚いた火を滅したこと。

七、仏の二衣のみが焼けなかったこと。

右のことがらがあげられている。いまこの中から、有部の論師たちが積尊の般涅槃を実感としてうけとめている顯著なる例をあげてみよう。

(一) 仏の般涅槃の定について

発智論の所伝は、世尊は不動寂靜によつて般涅槃し、世間の眼を減ずるといふ。^③これは有部毘奈耶雜事の説と同じである。すなわち、「仏世尊、辺際定寂然不動に入れば、此れより無間に世間の眼閉じ、必ず涅槃に入る」といふのである。

さて、涅槃に臨んだ釈尊は、

- 1、欲界の善心を起してこの無間に初靜慮に入り、
- 2、初靜慮より第二靜慮に入り、次第して無所有處より非想非々想處に入り、
- 3、非想非々想處より無間に滅受想定に入り、
- 4、滅受想定より無間に無所有處に入り、
- 5、滅受想定より無間に無所有處に入り、
- 6、無所有處より非想非々想處に入り、
- 7、非想非々想處より識無辺處に入り、
- 8、識無辺處より無所有處に入り、
- 9、無所有處より空無辺處に入り、
- 10、空無辺處より識無辺處に入り、
- 11、識無辺處より第四靜慮に入り、
- 12、第四靜慮より空無辺處に入り、

- 13、空無辺処より第三静慮に入り、
 - 14、第三静慮より第四静慮に入り、
 - 15、第四静慮より第二静慮に入り、
 - 16、第二静慮より第三静慮に入り、
 - 17、第三静慮より初静慮に入り、
 - 18、初静慮より第二静慮に入り、
 - 19、第二静慮より第三静慮に入り、
 - 20、第三静慮より第四静慮に入り、
 - 21、第四静慮より起って、すなわち般涅槃をする、といふのである。^⑤
- これは南伝大般涅槃經にあっては、五番以後が異なり、北伝遊行經は南伝と全同であり、有部毘奈耶は、上記の兩經とほぼ同じである。婆沙が前掲のような伝承をもっていることは小乗の比丘たちは、これを伝えて信じている訳である。

(二) 拘尸城において般涅槃したこと

世尊が拘尸城において般涅槃したことの理由の一としてある者は、拘尸城内のものに、如来の遺身の一分をわかち与えるためであるといひ、また、仏舍利を広く流布せんがためであるといふ。^⑥このように、有部は仏舍利についての明瞭な意識をもっていることがわかるのである。

(三) 仏は北首、右脇にして般涅槃する

この伝承をうけた有部にあつては、その理由の中の一として、インドの習慣では死者は北首するという例があり、仏はつねに吉祥であるという想念を破するために、自ら北首し、涅槃に臨んだのであるといふのである。^⑩ 釈尊が北首して般涅槃されたことは、遊行経第二、^⑪ 有部毘奈耶雜事第三十七等^⑫に説かれているところである。

(四) 香乳をもって如来を焚いた火を滅す

有部所伝の契経の中に、尊者大迦葉が釈尊を焚いた火を、香乳をもって消したことを伝えている。^⑬

この契経を伝えている有部の論師は、このように香乳をもって如来の身体を焚いた火を消したことの理由の一つの中に、それはインドの風俗にあつては、仙人が命終すれば、乳をもって身体を焚いた火を滅し、凡夫が命終すれば酒をもって焚身の火を消すことになっており、仏は仙人中の最勝であるから、いま香乳をもって焚身の火を滅したといふのである。^⑭ この香乳滅火の契経は、長、阿含卷四遊行経や、^⑮ 有部毘奈耶雜事卷三十八、^⑯ また南伝の大般涅槃経にも^⑰ みることができる。

(四) 仏の二衣のみ焼けず

如来を焚いたとき、仏の千衣の中、外衣と內衣の二衣のみ焼けなかったという阿難の偶頌をもつた契経が伝えられている。^⑱ 有部の論師はその理由の一として、それは仏舍利を守るためであるといふのである。二衣不焼については有部毘奈耶雜事卷三八、^⑲ 南伝の大般涅槃経等に説かれているところである。

(六) 八十入滅

右のような事象の伝承にあつては、釈尊はいかに解脱を成就したといつても、八十才をもって入滅したといふ実感は、切々として弟子たちに伝えられたに違いない。八十入滅についても、それでは何故に八十才にて入滅したのであ

ろうか、と問うにおいて、有部のある論師はつぎのようにいつている。それは毘陀夷があるとき、世尊のために身体や手足を按摩するに、世尊の身体はのびてしまるところがなく、諸根は変異し、容貌は常に異なるといっていたが、そのときでさえかくの如きであるので、釈尊も八十才をすぎれば、なお常と改まることは必定である。故に世尊は老衰をさけて多くの寿行を捨するのであると語っている。²¹これは一論師の説であるが、このようなことが伝えられている有部では、釈尊は八十才にして完全涅槃に入ってしまったと考えざるをえないであろう。

B 釈尊における力用の限界の一例

仏は大慈大悲にして徳用において完全円満具足するとは、大聖釈尊に対する吾人の通念の一であるが、有部伝承の釈尊は、決してさような徳用はもち合せてはいない。いまその一二の例を示そう。

(一) 仏の慈心の限界

有部伝承の契経に、仏は大慈をもつて有情をいつくしむと説かれるところがある。²²さてこの契経について論師たちは仏の大慈によってあまねく有情が業をうるのであれば、どうして地獄、畜生、餓鬼やその他の有情も、苦から離れることがないのであるか、というのである。そこである論師は、仏は有情の業の可転不可転を観察して、業の可転のもののみを観じて大慈を起すというのである。²³これは一論師の説ではあるが、このような説が唱道されるがごとき仏陀の徳用についての観察がなされていたことを知ることができる訳である。

(二) 仏の退

有部の論師は、仏に退ありや否やと問うている。その答えとして、仏もついに退ありと説くのである。

有部は退に三種ありとし、一にはすでに得して退すといひ、二には未だ得せずして退すといひ、三には受用を退す

というのである。⁽²⁴⁾

仏の退というのは、この受用の退であるという。それはすでに得した諸の勝功德において、ときとして現在前せざることがあるというのである。⁽²⁵⁾

しかもこの受用の退は、三乗中、仏がもっとも多いというのである。それは仏の一刹那の間の功德の現在前せずして受用の退あるときは、これを二乗についていえば、二乗の一生涯における受用の退よりも多いからであるという。⁽²⁶⁾

このような徳用における限界があるとされるのである。それでは一体積尊の宗教的な役割はいかようにして果されているのであろうか。

C 有部における積尊の宗教的存在

このようにして、積尊はついに歴史的一覚者の領域にとどまらざるを得なくなった訳であるが、しかし、有部といえども一宗教であり、しかも、玄奘の報告によれば、玄奘在印当時もかなり有力であった事実からも、有部の宗派としての優勢さがうかがえるのである。さてそれでは有部の宗教的積尊観といえはいかにということになると、これを信奉者の念ずる仏、修行者の念ずる仏との二面からうかがうことができる。

(一) 信奉者の念ずる仏

仏教入信の基本条件として、原始仏教以来、三宝帰依が説かれている。有部としてこの三宝帰依は基本的儀礼の一として説かれることは論をまたないが、さてそれでは「帰依仏」における「仏」とはいかにということが問題である。これを発智論は、

諸の仏に帰依する者、何所に帰依するや。答ふ、若し法の実有、現有にして、想、等想あり、施設し、言説するも

のならば、名けて仏陀と爲し、彼の所有の無学を成ずる菩提の法を帰依するを、帰依仏と名くるなり。

と説き、有部の論師はこれを、²⁸⁾

一、法の実有とは、実に仏体ありということ、
二、現有とは、仏体が現の如く実有にして、曾有等にあらざることをいうとし、

三、想とは、仏を縁する想をいふもの、

四、施設とは、想によって名を施設することをいふ、

五、言説とは、名によって言説の発せられ転ずをいう、とする。²⁹⁾

右によって理解できることは、南無仏と帰依する信奉者の念ずる仏は、実有であり、現有であり、決して八十八滅の釈尊ではないということがわかるのである。

(二) 修行者の念ずる仏

修行者において、初果以前の出家者の仏を念ずるに、

仏の威力によるが故に、我等、災横、王役、種々の苦事より解脱し、及び世間の諸の資生の具を得ん。³⁰⁾

とこのように念ずるといふ。ここでは仏威力によって出家の功德と世間の得益を念じていることがわかる。

つぎに聖者の念ずる仏とは、

仏の威力によるが故に、我等、永く諸悪趣の因を捨し、二十種の薩迦耶見を断じ、正決定を得し、四聖諦を見て、無辺際なる生死輪廻の諸の苦事中に於て已に分限を作せり。³¹⁾

とこのように説かれている。すなわち、仏威力によって我見を断じ、四諦をみて、輪廻より解説することを念ずるといのである。

右は一部の修行者の紹介であるが、総じて修行者は仏威力を信じ、衆生を苦より解脱せしめる大恩徳を有する法王であつて、従つて衆生によって愛敬さるべきものであるといふのである。ここでいふ愛敬とは、信じ求め敬うの意である。

(三) 有部の三世説と仏身觀

このように、實際修行者の念ずる仏身は、八十入滅の積尊とことなり、つねに行者の前に威神力を具して現在前する仏陀である訳であるが、これを客觀的に、有部のたてる三世説とあわせて論ずるところがある。

有部の主張は三世実有法体恒有を説くところにあるのはいふをまたない。諸法は生滅変化してとどまるところがないが、それでも法体は恒有であつて、それが作用の上において、未作用の位を未來といい、正作用の位を現在といひ、已作用の位を過去といふと説くのである。

それでは、過去の一切は已作用であつて、現在には不現であるとしなければならぬが、それは當をえているか、また不現なるものはこれ過去なりといふことができるか、といふ過去と不現との關係について有部の論師は論究するのである。

過去と不現とは、一に過去にして不現にあらざるもの、二に不現にして過去にあらざるもの、三に過去にして不現のもの、四に過去にもあらず不現にもあらざるもの等の四句に分別されるとし、一の過去にして不現にあらざるものとは、いわく仏身なりといふのである。すなわち、過去とは一切の結は過去して解脱し、不現に非ずとは、仏身は

現在にして而も顕現す、というのである。⁽³²⁾

これが有部の仏身觀の一部である。この仏身觀は前述した修行者の念ずる仏陀である。これをもってみても有部の論師たちは、諸法分別においてつねに論理を追いながらも、その背後には實際修道の裏付けをもっていることがわかるが、いまこの仏陀論もその一例であるといえる。

D 仏の留化事の有無について

このように釈尊滅後において、修行者の上には仏陀の現在前することが説かれているが、これは仏陀の變化身となすべきか、というに決してそうではない。それは仏に留化事ありや否やの課題における有部の所論についてそのようにいえるのである。

仏教にあっては、教化の方便、ないし神通の力用において、しばしば變化身が説かれる。有部ではこの變化身に八種をあげるが、さて、仏には化身を留めて法を説くこと（留化事）があるのか否かということである。これに二説があつて、一は仏に留化事ありとし、二には仏に留化事なしというのである。しかし、仏に留化事ありとするならば、何故に仏は般涅槃の時、化身をとどめて滅後において住持し説法して有情を利益せしめなかつたのであろうか、これに反して、もし仏に留化事がなかつたならば、何故に尊者大迦葉は、すでに般涅槃したのに、さらに留身して久しく住したのであるか、というのである。

大迦葉の留身というのは、大迦葉は鷄足山中において、慈氏如来の出現にあつて仏事を施作せんことを願つて般涅槃した。慈氏如来の出現するや、たちまち鷄足山中より出でて仏事をなしたというのであつて、このように大迦葉にすら留化事があるのに、仏に留化事のないはずはない、だが、事実問題として、仏に留化事実はなかつたが、これは

いかにという訳である。この点についての論師の意見の中には、仏はまさに度すべき者はみな度し終ったからで、いまだ度せざる者は、弟子がこれに代って度するところであるというのである。^⑤これによってみる限り、有部の釈尊は滅後の化事はなかったとみらるべきで、他の經典において説かれるが如き、如来滅後の衆生を救済するために變化身を化作し、または応身と作るというが如きはないとみるべきであろう。

三、法華経の釈尊

このように、小乗有部の仏陀は、歴史的釈尊に即して説かれることが表面にたっていて、その宗教的性格のほとんどが、信奉者、修行者の善思念によって形成せられ、その仏陀像は教説の上において表顕せられたものではなかった。従って修行者の持する戒律、修禪がもつとも重要な基盤となつて、憧憬する釈尊像をつくりあげているのであるが法華経にあつてはこれと教説の支点をまったく異にし、釈尊の性格が全巻をおおぐがごとく力強く打ち出されて、まず求道者の依拠すべき釈尊像が表顕せられていることである。

法華経における釈尊は、その歴史性から脱却して、衆生救済、法華経弘教等の誓願使命をもつて出世したことを教条の第一義において説くとともに、その釈尊が、常住不滅であると究竟の相を表顕して説く宗教性に、前述した小乗の仏陀観ときわめて顕著な相違を見出すのである。

従来、法華経の釈尊は教主に大きな位置づけがなされたが、いまこのようにみるとときには教主とともに、教主であることもまた見逃すことのできないことがらとしてとらえることができる訳である。それは法華経が仏の誓願を核として救済の道筋が説かれ、その仏は、釈尊もすべて寿命長遠であると説かれているからであつて、左に若干の顕著な説相を例示してみよう。

一、一切の諸仏の出現は、衆生に仏知見を開示悟入せしめるためであった。³⁶
一、それはまた小乗にあらざりて大乘によつて衆生を濟度するにあつた。³⁷

一、諸仏の本の誓願（ブラニダーナ）は、積尊の行じた所の仏道をあまねく衆生をして修行させ道を得せしめんとするにあるといふ。³⁸

一、如来はすでに三界を離れているが、三界のわが子たちはそこで焼かれ苦しんでいる。われこそこれらの救護（トラーナ）をなすものであるといふ。³⁹

一、われはこれ如来、衆生を安穩（サンターラナ）ならしめんがために世に現われたと説く。⁴⁰

一、かの梵天王は仏にむかつて、諸仏救世（ローカナタータナ）の聖尊を見たてまつるに、よく三界の獄より衆生を出したもうことを見るといふ。⁴¹

一、如来の滅後、法華経の一句をも説くものがあれば、これは如来使（タターガタドウィタ）であるといふ。⁴²

一、勸持品における菩薩の弘経の本願。

一、安樂行品における法華経護持の大誓願。

一、つねに衆生をして、速かに仏身を成就することをえせしめんと願う。⁴³

これらの文は、ほんの一部をとり出してみたにすぎない。このように、諸仏積尊の世に出現するのは、衆生の救済のためであるといふ。この救世の願が力強く説かれているのであるから、行者はこれを信（シュラッター、アディムクティ、ブラサーダ）することに於いて、法華経に入ることが出来る訳である。

つぎにこの諸仏積尊が寿命長遠で、つねに衆生の前に現在前するといふのである。

一、「久遠劫より来た、涅槃の法を讚示して生死の苦を永く尽す」と、積尊は常に説かれたといふ。⁽¹⁴⁾

一、われは実に成仏してより已来、無量無辺百万億那由他劫である、と説いている。⁽¹⁵⁾

一、われは成仏してより已来、甚大久遠、寿命無量、常に住して滅せず、といふ。⁽¹⁶⁾

一、世尊には大力ありて、寿命は不可量である。⁽¹⁷⁾

一、仏の寿命の長遠なるを聞いて、一念信解を生ずれば、得る所の功德は限りなしと説く。⁽¹⁸⁾

このようにして、積尊をはじめ、諸仏の寿命は長遠で、つねに求道者の前に現前することを念じていると説かれる訳で、これは、小乗において修行者の持戒、修禪の想念の上においてのみ現在前する仏と教説の支点をまったく異にするところであるといえる。

四、小 結

いま、三乗において説かれている仏と、法華経において説かれている積尊像とを、比較しつつ両者の積尊像の特異点を考察してきた。その限りにおいては、両者は宗教的に出発点を異にしていることがわかった。すなわち小乗有部にあつては、宗教的積尊像―歴史的積尊の枠にはめられていない―は、修行者の想念の上にイメージアップされたものであるに反して、法華経の積尊は永遠不滅の救世者としてすでに説き明されているといふことであつた。従つて前者にあつては持戒、修禪が行者のもつとも重要な修道法であるに對して、後者にあつては、教説への信順がまず第一に要求されるという相違がみられる訳である。こうした相違点のみからみれば、法華経教団は、小乗有部教団と交渉はありつつも、また一方において独自に教条がうちたてられたものであらうと考えられる。もちろん同じ源泉から

出たものであることには相違ないが。右によって、三乗における仏と、法華經に説かれた釈尊の相違点の一斑を示したと思う。従来 of 学説をおおく出たところはないが、小乗と大乘、いまはこれを法華經との関係において、教理史上の取扱いでなく、宗教学の面から考察した点に、本研究の意義をあげうると思う。

註

① 坂本幸男編『法華經の思想と文化』、第一篇第一章中、「(C)部派仏教と法華經の交渉」、一九六五年刊。

この水野博士の論文は部派仏教と法華經とが、ほとんど関連のないことを論じられたものとして貴重な論文であると思う。本研究にあたって大きな便益を与えられた著書の一として

横超慧日編『法華思想』一九六九年刊がある。中でも藤田宏達博士の「一乗と三乗」と、横超慧日博士の「法華經の仏身觀」の各論文は、本研究と直接のかかわりのある点で、大いなる示教を得た。

また、稻荷日宣著『法華經一乘思想の研究』昭和五十年刊をも参照した。実証的に資料も豊富にあげられ、藤田博士の説をも紹介されており、おおくの示唆をえた。

ともに記して感謝の意を表す。

② 婆娑論卷一九一、大正二七、九五五bから卷一九二、大正二七、九五八cまで参照。

③ 發智論卷一九、大正二六、一〇二四a参照。

④ 大正二四、三九九b参照。

⑤ 婆娑論卷一九一、大正二七、九五五c参照。

⑥ 南伝大藏經長部經典二、一四四―五ページ参照。

⑦ 大正一、二六c参照。

⑧ 大正二四、三九九b参照。

⑨ 婆娑論卷一九一、大正二七、九五六b参照。

⑩ 同右、大正二七、九五六c参照。

⑪ 大正一、二一a参照。

⑫ 大正二四、三九二b参照。

⑬ 婆娑論卷一九二、大正二七、九五八c参照。

⑭ 同右、大正二七、九五八c参照。

- 15 大正一、二九b参照。
 16 大正二四、四〇一b参照。
 17 南伝大藏経長部經典二、一五七ページ参照。
 18 婆娑論卷一九二、大正二七、九五八c参照。
 19 大正二四、四〇一b参照。
 20 南伝大藏経長部經典二、一五七ページ参照。
 21 婆娑論卷一二六、大正二七、六五七b参照。
 22 同 卷八三、大正二七、四二八c参照。
 23 同右、大正二七、四二九a参照。
 24 同 卷六〇、大正二七、三一五b参照。
 25 同右、大正二七、三一五c参照。
 26 同 卷六一、大正二七、三一六b参照。
 27 発智論卷二、大正二六、九二四c参照。
 28 同右、大正二六、九二四c参照。
 29 婆娑論卷三四、大正二七、一七七b参照。
 30 同 卷二九、大正二七、一五一a参照。
 31 同右、大正二七、一五一ab参照。
 32 以上同卷一三、大正二七、六五bc参照。
 33 同 卷一三五、大正二七、六九六c参照。
 34 同右、大正二七、六九八b参照。
 35 同右、大正二七、六九八b参照。
 36 方便品の欲令衆、坂本博士訳(岩波文庫本)九〇ページ、以下坂本本とす。
 梵本、法華経 BUDDHIST SANSKRIT TEXTS No. 6 Edited P. L. VAIDYA. 一七ページ参照。
 37 方便品。坂本本、上、一〇六ページ。
 梵本、テキスト、第五五偈、三一ページ参照。
 38 方便品。坂本本上、一一八ページ。
 梵本、テキスト、第一〇〇偈、三七ページ参照。
 39 譬喻品、坂本本、上、一九八ページ。

- 梵本、テキスト、第八八偈、六二ページ参照。
- ④⑩ 藥草噲品。坂本本、上、二七六一八ページ。
梵本、テキスト、第一九偈、八七ページ参照。
- ④⑪ 化城噲品。坂本本、五〇ページ。
梵本、テキスト、第四七偈一一五ページ参照。
- ④⑫ 法師品。坂本本、中、一四四ページ。
梵本、テキスト、一四三ページ参照。
- ④⑬ 寿量品。坂本本、下、三六ページ。
梵本、テキスト、一九五ページ参照。
- ④⑭ 方便品。坂本本、上、一二六ページ。
梵本、テキスト、第一二七偈、四一ページ参照。
- ④⑮ 寿量品。坂本本、下、一二ページ。
梵本、テキスト、一八九ページ参照。
- ④⑯ 寿量品。坂本本、下、一八ページ。
梵本、テキスト、一九〇ページ参照。
- ④⑰ 分別功德品。坂本本、下、四四ページ。
梵本、テキスト、一九七ページ参照。
- ④⑱ 分別功德品。坂本本、下、四八ページ。
梵本、テキスト、一九九ページ参照。